

J-オイルミルズのあゆみ -創立 20 周年にあたり-

J-オイルミルズは「ホーネンコーポレーション」「味の素製油」「吉原製油」が経営統合して 2004 年に発足しました。当社が創立 20 周年を迎えることができたのは、全国油脂販売業者連合会の会員企業の皆さまをはじめ、今日まで当社の発展をサポートしてくださったお客さま、当社製品をご愛顧いただいている生活者の皆さまをはじめとするステークホルダーの皆さまに支えられたお陰でございます。

当社創立 20 周年にあたり、前身である各社の生い立ちを植物油の普及の歴史とともにご紹介させていただきます。



■ホーネンコーポレーション

1906（明治 39）年、中国東北部の鉄道の管理・運営と同地での産業の振興を目的に「南満洲鉄道」が設立されます。1907（明治 40）年 10 月には大連に中央試験所を開設し、搾油技術の改善に関する研究を開始しました。その後、将来のさらなる産業化を目指して大豆油の製造を民間経営に任せることとし、委譲先に決まったのが、総合商社「鈴木商店」でした。

同社は製油部門を創設し、設備を増強していくとともに、静岡県、兵庫県、神奈川県に工場を建設し、大連を含む 4 工場での生産体制を構築しました。その後、鈴木商店は製油部門の分離独立を決め、1918（大正 7）年、新会社「豊年製油」を誕生させました。

■味の素製油

まだ江戸時代だった 1826（文政 9）年、古くからエゴマの産地であった現在の愛知県一宮市に、熊沢家が水車式搾油場をつくりました。明治初期までは東海地方周辺の綿実油や菜種油を中心に原油を加工していましたが、その後、事業を拡げ、三重県四日市で油問屋を開業します。当時、油問屋は近在の農家が自家生産した菜種原油を買い集めるだけでなく、農家から菜種を買って搾油し、製油業者に加工させる場合もありました。そうして出来上がった油に、自家の商標「いちかわ印」をつけ、出荷していました。1884（明治 17）年 6 月に商標条例が定められると、直ちに申願し、これがわが国の植物油脂登録商標の第 1 号といわれています。

その後、熊沢家の水車式搾油場は、1906（明治 39）年に熊沢製油場、1918（大正 7）年に熊沢製油合資会社、1942（昭和 17）年に熊沢製油産業へと発展し、1966（昭和 41）年には味の素の資本となりました。

■吉原製油

1855（安政2）年、吉原治助は江戸積み油問屋の川田屋の事業を引き継ぎ、大阪天満で「吉原商店」を開業します。その後、1894（明治27）年には店舗内に精製設備を導入し、菜種油の精製を開始しました。その後、増大する一方の需要に応じるため1907（明治40）年には大阪市内に精製専門の野田工場を建設しました。やがて菜種油だけでなく、大豆油やヒマシ油など多様な油を扱うようになり、1917（大正6）年には大阪府堺市に堺製油所を創設し、本格的な製油業に進出します。そして翌年には大阪市内に「吉原油脂工業所」を開設し、同業の工場を買収して関西に4つの工場を有する製油メーカーとして発展。昭和初期には菜種油やエゴマ油の対米輸出高は全国第1位を誇る規模となりました。1932（昭和7）年には工場を集約し、当時としては最新鋭の工場を兵庫県西宮市に完成させ、「吉原製油」として問屋業から分離独立を果たしました。

明治以降、都市部では欧米の食文化が急速に広がり、日本の食生活における「植物油」の利用も急速に進みました。植物油の需要拡大とともに当社の前身である3社の基礎が築かれていきました。

次に、戦後以降の歴史についてご紹介したいと思います。

戦後の日本は、極度の物資不足に見舞われます。製油業界も油脂の原料の確保において困窮を究めましたが、政府が大豆・菜種の増産政策を進め、1948（昭和23）年には戦後初となる大豆の輸入船が米国から豊年製油清水工場に到着するなど、徐々に復興の道を歩んでいきました。その後、1961（昭和36）年の大豆輸入自由化と高度成長を背景に製油各社は設備増強を活発化させました。

日本の食生活も戦後の混乱期から徐々に変化し、植物油の販売形態も大きく変化します。それまで植物油は小売店で量り売りなどによって販売されていましたが、容器の個装化、扱いやすさのための工夫がされていきました。初期には一升瓶や金属製の缶容器が主流でしたが、保存性の高いプラスチック素材や容器製造技術が開発され、ペットボトルや把手（とって）付ボトル等が一気に普及し、消費者からも好評でした。

また、高度成長期にはファストフードやファミリーレストランが誕生し、その後もさまざまな業態が次々と登場し、外食が日常的な存在となりました。また、その後スーパーマーケットやコンビニエンスストアなどで販売されるお弁当・お総菜などの中食需要も大きく伸長しました。そこでも油脂製品が多く利用され、当社の前身である各社は外食・中食分野においても存在感を示してきました。

1990年代になるとバブルが崩壊し、国内経済は徐々にデフレ色を強めていきます。デフレ下で需要と供給のギャップが徐々に大きくなり、製油各社の業績は低位に推移していきました。また、WTOの設立や新興国の台頭などで、業界は過当競争からの脱却が急務となっていきました。こうしたなか、製油業界の再編が本格的に始まりました。2002（平成14）年、共同持株会社として豊年味の素製油を発足し、その翌年には吉原製油も合流して、持株会社の名称を「J-オイルミルズ」に変更しました。2004年7月には、日本大豆製油も含めた事業会社4社が統合し、現在の当社が誕生しました。

当社はこれまで人々の生活に欠かせない植物油を安定的に供給することに努めてまいりましたが、加えて当社が企業理念において目指すべき未来（ビジョン）に掲げている「おいしさ×健康×低負荷」を軸とした高い付加価値を製品・サービスを通して提供することで、次の30年、50年もステークホルダーの皆さまのご期待に応えてまいります。

当社ホームページでも「J-オイルミルズのあゆみ」をご紹介します。ぜひご覧ください。

<https://www.j-oil.com/infotainmaint/group-history/>